

伊藤鳳山傷寒論文字攷訳注 二

—— 傷寒論の受容と展開 (四)

杉山寛行
浅井邦昭
河井昭乃

本稿は、「伊藤鳳山傷寒論文字攷訳注 一 —— 傷寒論の受容と展開 (三)」(今鷹眞編『東アジア諸文化と儒教文化の混濁と対立』平成9年3月所収 平成7年8年度特定研究報告)に引き続いて、伊藤鳳山『傷寒論文字攷』のうち、張仲景自序の後半部分に訳注を施したものである。底本には、嘉永四年唐澤惇熙堂蔵版刊本(昭和六二年 汲古書院影印本)を用いた。本稿において目標とするところの第一は、伊藤鳳山の『傷寒論文字攷』を精読することとそれを通じて江戸期日本における『傷寒論』の受容と展開の一端を明らかにすることである。江戸期日本における『傷寒論』の受容と展開のありかたは、中国近世におけるそれとは大いに異なった様相を示していると思われるからである。更にまたここでは、江戸時代の儒医がどのよう

な知的環境の下でその営みを進めていったかを訳注のかたちで測り示すことにもおいている。

夫天布五行

注家¹曰く、天は五行を布く以下、皆是れ繁衍²叢脞³の言にして、全て叔和撰次の語に係り、仲景氏の舊に非ざるなり。諺に謂ふ所の貂⁴足らずして狗尾續く者なるのみ。何ぞや。思ひ半ばに過ぐの句、既に一篇の結尾を爲すに、而るに復た別に一段の議論を起こす、是れ微の一なり。天は五行を布く以下、文理屬⁵かず、體裁⁶廻かに別かる、是れ微の二なり。前に越人と稱し後

に扁鵲と稱するも、亦た一人の口氣に非ず、是れ徴の三なり。後段、時醫を譏るに、經旨を求めず、務めは口給に在りとす、是れ前段の悉くす所なり。假令たとひ仲景耄ぼるとも、亦た豈に此くの如く其れ鄭重ならんや、是れ徴の四なり。仲景の論中、未だ嘗て五行經絡を説かざるに、後段乃ち之れを説く、是れ徴の五なり。仲景の論中、未だ嘗て三部九候、明堂關庭を以て之れを診ざるに、後段乃ち之れを説く、是れ徴の六なり。此の論、往昔の淪喪に感ずるに由りて之れを起せば、則ち文の起くる所に止まるは、其の實を得たりと爲す。獲麟の義、以て徴すべし、是れ徴の七なり。七徴既に得なば、奸其れ掩ふべけんや、と。

馨謹んで案ずるに、此の七徴、一として徴と爲すに足る者無し。請ふ試みに之れを辨せん。

前段唯だ居世の士を譏るのみ、故に後段は端を改め以て醫家の事に及ぶ。乃ち別に一段の議論を起こすは、理固より當に然るべし。何ぞ怪しむに足らんや。蓋し注家、通論皆時醫を譏ると以爲へるならん。故に此の說有り。豈に大いに誤らずや。是れ一の徴、徴と爲すに足らざるのみ。

前段は入虢望齊を以て端を起こす、故に後段は視死別生を以て之れを結ぶ。前段は越人の學才の秀でたる

を陳ぶ（發端に謂ふ所の才秀は、秀才と同じからず。學問に因りて而して其の才の秀でたるを言ふなり。性質を説くに非ざるなり。然らずんば則ち下文の怪の字、承接する無し。夫れ人學問すれば、則ち其の才の秀でたること越人の如くなるべきも、然れども肯へて學ばず、故に之れを怪しむのみ）、故に後段は神農黃帝云云を擧げ、而して古への學才高く、學識妙なる者を列して之れを結ぶ（神農の悉諸に學ぶは、呂氏春秋に見ゆ。黃帝の岐伯に學ぶは、素靈に見ゆ。岐伯の僦貸季の道を祖とするは、素問に見ゆ。伯高雷公以下の諸人も亦た皆學びて其の才を成す者なり）。蓋し仲景の方術を尚ぶは、越人の才に感ずるに始まり、孔子の語を事とするに成るならん。故に越人を以て端を發し、孔子を引きて之れを終ゆ。前段の勤めて古訓を求め（古訓は古經を謂ふなり。尚書說命、大雅蒸民に謂ふ所皆然り。法言に云ふ、勤は苦なり¹¹。と。求は講求なり¹²。勤求とは猶ほ苦學と言ふがごときなり。注者、韻府を引きて古人の誠と釋くは、誤りなり）博く衆方を采るは、後段に謂ふ所の多聞博識、是れなり。是れ前後首尾相ひ應ずること、殆ど常山の蛇の如し¹³。何ぞ曾て文理屬かず、體裁迴かに別かるるを見んや。是れ二の徴、徴とするに足らざるのみ。

前に扁鵲と稱する者は、但だ是れ文の便に因るのみ。故に抱朴子至理篇¹⁵も亦た前に兪對扁鵲の流と曰ひ、後に越人、號の太子を救ふと曰ふ。左傳隱元年、初め鄭武公の段、前に公子呂と記し、後に子封と書く（杜注に云ふ、子封は公子呂なり、と）の類、枚擧に暇あらず。若し果たして注家の言ふ所の如くんば、則ち凡そ此くの如き者も亦た概ね一人の口氣に非ずと爲し、而して之れを削るか。妄りと謂ふべし。漢書郊祀志に曰く、其の神嘗に夜を以て東方より來たること雄雉の若く、其の聲殷殷如として野鷄夜鳴く、と。顏師古注に云ふ、上に雄雉と言ひ下に野鷄と言ふは、史、文を駁せしなり、と。此に前に越人と言ひ、後に扁鵲と言ふは、亦た顏氏の謂ふ所の駁文なり。是れ三の徵、徵と爲すに足らざるのみ。

前段は獨り居世の士を論じ、而して醫家の技を驚ぐ事に及ばず、故に務めは口給に在り等の語、一句として見ゆる所無きなり。然れども今前段の悉くす所と曰ふは、是れ何等の見ならん。是れ四の徵、徵と爲すに足らざるのみ。

仲景氏の治療に於けるや、縱使ひ五行經絡を主張せざるも、天地人身を論ずるに至りては、豈に天に五行無く、人に經絡無しと謂ふべけんや。此の條の如きは

則ち唯だ天地の萬類を運らすと人身の幽微たるを論ずるのみにして而して治療の事に涉らざれば、則ち五行經絡を説くも、亦た何ぞ妨げん。是れ五の徵、徵と爲すに足らざるのみ（仲景氏の治療に於けるや、深くは五行經絡に泥まざると雖も、然れども絶えて之れを取らざるには非ず。十六卷中、鑿鑿として徵有り。然れども彼の注者の徒、己の私見を師とし、妄りに多く本文を刪削して説を立つれば、則ち縱ひ之れを辨ずると雖も、固より堅白決し難きの辨に屬せん。故に姑く之れを論ずることは是に止めん）。

素靈を撰用するも而れども専らには岐黃に依らず、別に一家を立つる者は、蓋し仲景氏に創まるならん。然らば則ち當時の鑿家、専ら素靈を以て學と爲さば、三部九候、明堂闕庭の診は其の主張する所なり。然れども時鑿其の法に従ふ能はず、故に之れを責む。縱ひ己の取らざる所と雖も、此れを以て之れを責むるも、亦た何ぞ妨げんや。若し仲景氏始めて一家の言を立て、而して時鑿の己の言に従はざるを以て之れを譏らば、則ち豈に刻に庶幾からずや。但だ其の古鑿方の法に従はざるを以て之れを責むるは、理固より當に然るべきなり。是れ六の徵、徵と爲すに足らざるのみ（人迎、趺陽、寸口、參診の法なる者は、蓋し三部九候の類な

らん。²⁶ 察色の診は則ち往往にして金匱に散見す。²⁷ 然らば則ち三部九候、明堂闕庭の診、仲景絶えて之れを取らざるには非ざるなり。然れども注者の徒、悉く刪りて之れを去れば、則ち縦ひ之れを辨ずると雖も、亦た堅白決し難きの辨に屬す。故に今之れを置く。

蓋し仲景氏の方術を尚ぶは、本と越人の才の秀づるに感ずるに由るならん。故に越人を以て端を起こし、宿尚方術を以て之れを結べば、則ち未だ曾て其の實を得ると爲さずんばあらざるなり。夫の春秋の若きは、公穀は經、獲麟に止り、而して左氏は經、孔丘卒に終り、各々異同有り。其の説を爲すも亦た皆同じからず。蓋し孔丘卒の一段は、是れ丘明、魯史の爲めに記す所にして、其れ以上は則ち盡く夫子の筆削ならん。然らずんば則ち丘明豈に聖人の筆削を僭攝すべけんや。但だ左氏に従ふを是と爲す。公穀を奉ずる者は、杜預の陋見なるのみ。先儒嘗て之れを論ず。²⁸ 然れども注家其の徴とすべからざるを以て徴と爲すは、豈に甚だ謬まらずや。是れ七の徴、徴と爲すに足らざるのみ。

七徴既に徴と爲すに足らざれば、則ち注家の辨、反て其の奸たるを免かるべけんや。

康熙字典子集下力部「勤、…又〔揚子法言〕民有三

勤。〔註〕勤、苦也。」

1 山田正珍 傷寒論集成首卷張仲景自序解「但其天布五行以下、皆是繁衍叢脞之言、全係叔和撰次之語、非仲景之舊也。諺所謂貂不足狗尾續者已。何者。思過半句、既爲一篇結尾、而復別起一段議論、是徵一也。天布五行以下、文理不屬、體裁迥別、是徵二也。前稱越人、後稱扁鵲、亦非一人口氣、是徵三也。後段譏時醫、不求經旨、務在口給、是前段所悉。假令仲景耄也、亦豈如此其鄭重乎、是徵四也。仲景論中、未嘗說五行經絡、後段乃說之、是徵五也。仲景論中、未嘗以三部九候、明堂闕庭診之、後段乃說之、是徵六也。此論由感往昔之淪喪而起之、則文止於所起、爲得其實、獲麟之義、可以徵矣。是徵七也。七徴既得、奸其可掩哉。」

2 毛詩注疏卷六之一唐風 椒聊「椒聊之實、蕃衍盈升。彼其之子、碩大無朋。椒聊且、遠條且。」

3 尚書注疏卷五虞書益稷第五「又歌曰、元首叢脞哉。股肱惰哉。萬事隕哉〔孔傳。叢脞、細碎無大略〕。」

4 晉書卷五十九列傳第二十九趙王倫「每朝會、貂蟬盈

坐。時人爲之諺曰、貂不足、狗尾續。」

時惟建事。學于古訓、乃有獲。」

5 論語集注卷三公治長第五「或曰、雍也仁而不佞。子曰、焉用佞。禦人以口給、屢憎於人。不知其仁、焉用佞（集注。：佞人所以應答人者、但以口取辦而無情實。」

10 毛詩注疏卷十八之三大雅 蒸民「古訓是式、威儀是力。天子是若、明命使賦（毛傳。古、故。訓、道。若、順。賦、布也）。」

6 春秋左傳注疏卷五十九哀公十四年「經、十有四年、春西狩獲麟（杜注。麟者、仁獸、聖王之嘉瑞也。時無明王、出而遇獲。仲尼傷周道之不興、感嘉瑞之無應、故因魯春秋而脩中興之教、絕筆於獲麟之一句。所感而作、固所以爲終也）。」

11 揚子法言 先知第九「或問民所勤（李軌注。勤、苦）曰、民有三勤。曰、何哉所謂三勤。曰、政善而吏惡、一勤也。吏善而政惡、二勤也。政吏駢惡、三勤也。」

12 伊藤鳳山 傷寒論文字攷續篇上「謹案、求者、講求也。猶好古敏以求之者也之求。初學或爲求索之求、故今辨之。講求字、見宣十二年左傳。」

7 呂氏春秋卷四孟夏紀第四尊師「三曰、神農師悉諸、黃帝師大撓（高注。悉、姓。諸、名也）。」

13 傷寒論集成首卷張仲景自序解「古訓、古人之訓。衆方、衆家之方也。佩文韻府云、訓、許運切。誠也。書、學于古訓乃有獲（說命下）。詩、古訓是式（大雅蒸民）。」

8 黃帝內經素問卷四移精變氣論篇第十三「岐伯曰、色脉者上帝之所貴也。先師之所傳也（王冰注。上帝謂上古之帝、先師謂岐伯祖世之師僦貸季也）。上古使僦貸季理色脉而通神明、合之金木水火土、四時八風六合、不離其常。」

14 佩文韻府卷七十二 十三問 訓「訓、許運切。誠也。男曰教、女曰。：古訓、〔書〕學于。一乃有獲。〔詩〕。一一是式。」

9 尚書注疏卷十商書說命第十四「說曰、王人求多聞、

15 孫子集註卷十一 九地篇「故善用兵者、譬如率然。率然者、常山之蛇也。擊其首則尾至。擊其尾則首至。擊其中則首尾俱至。」

16 抱朴子內篇卷五至理「皆曰、喻尉扁鵲和緩倉公之流、必能治病、何不勿死。：越人救虢太子於既殞、胡巫活絕氣之蘇武。」

17 春秋左傳注疏卷二隱公元年「初鄭武公娶于申、曰武姜。生莊公及共叔段。：公子呂曰、國不堪貳君。將若之何（杜注。公子呂、鄭大夫）。：子封曰、可矣。厚將得衆（杜注。子封、公子呂也）。」

18 漢書卷二十五上郊祠志第五上「來也常以夜。光輝若流星、從東方來、集于祠城、若雄雉、其聲殷殷云、野鷄夜鳴（師古曰、殷殷、聲也。云、傳聲之亂也。野鷄亦雉也。避呂后諱。故曰野鷄。言陳寶若來而有聲、則野鷄皆鳴以應之也。上言雄雉、下言野鷄、史駁文也。殷音隱）。」

19 傷寒論集成首卷傷寒論集成凡例「一、辨脈法、平脈法、傷寒例及辨發汗吐下諸篇、並是王叔和所摻、前輩

諸公既辨之。今從而不採用矣。」

20 公孫龍子卷下堅白論第五「堅白石、三可乎。曰、不可。曰、二可乎。曰、可。曰、何哉。曰、無堅得白、其舉也二。無白得堅、其舉也二。」

21 黃帝內經素問卷六 三部九候論第二十一「帝曰、何謂三部。岐伯曰、有下部、有中部、有上部。部各有三候。三候者、有天、有地、有人也。」

22 黃帝素問靈樞經卷八 五色第四十九「雷公問于黃帝曰、五色獨決于明堂乎。小子未知其所謂也。黃帝曰、明堂者、鼻也。闕者、眉間也。庭者、顏也。蕃者、頰側也。蔽者、耳門也。」

23 史記卷一百三十太史公自序第七十「序略以拾遺補藝、成一家之言。」

24 傷寒論 辨脈法第一「跌陽脈浮而瀉、少陰脈如經也。其病在脾、法當下利。」

25 同「曰、何謂陽不足。答曰、假令寸口脈微、名曰陽

不足。陰氣上入陽中、則灑浙惡寒也。」

26 伊藤鳳山 張仲景傷寒論自序集解「三部不參（佐井大瑞父曰、竊嘗疑之、古脉診法或不傳全。難經有寸關尺三部。其說雖詳、其實則迂遠、難爲用。一日讀傷寒論自序、曰、按寸不及尺。握手不及足。人迎、跌陽、三部不參。冷然有省。曰、古人三部不待他求也。夫寸者、手寸口、跌陽者、足跌陽脉、人迎者、即頸之動脉也。」參照佐井聞菴 傷寒論私撰卷下辨仲景診脉法。

27 金匱要略方論卷上臟腑經絡先後病脉證第一「問曰、病人有氣色見於面部。願聞其說。師曰、鼻頭色青、腹中痛苦冷者死。」

28 注19 參照。

29 春秋公羊傳注疏卷二十八哀公十四年「十有四年春、西狩獲麟。……何以終乎哀十四年。曰、備矣。」

30 春秋穀梁傳注疏卷二十哀公十四年「十有四年春、西狩獲麟。」

31 春秋左傳注疏卷六十哀公十六年「經十有六年……夏四月己丑、孔丘卒。」

32 春秋左傳注疏卷一春秋序「先儒以爲制作三年、文成致麟。既已妖妄。又引經以至仲尼卒、亦又近誣。據公羊經止獲麟、而左氏小邾射不在三叛之數。故余以爲感麟而作、作起獲麟、則文止於所起、爲得其實。」

33 伊藤仁齋 童子問卷下「春秋以道名分。蓋春秋聖人之史也。古者無載籍之傳世。善惡淑慝與時俱滅、無暴于天下後世。故亂臣賊子肆其欲、無所忌憚。故孔子因魯史以紀天下之善惡、所以制亂臣賊子之心也。孔子秉筆而不止、直至哀公十六年四月己丑孔丘卒之前而止。左丘明又承夫子之意、引而至哀公二十三年秋八月而止。……左氏經、至哀公十六年四月己丑孔丘卒而止。公羊穀梁經、至十四年西狩獲麟而止。蓋公穀本脫獲麟以下、不知後尚有二年經、因附會孔子反袂而泣等語。」

人粟五常

謹んで案ずるに、五常は上文の五行と辭異なるも義同じ、皆木火土金水を指すなり。五常に數義有り。

尚書泰誓に謂ふ所の五常を狎侮すとは、蓋し君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫を指すならん。列子楊朱篇に曰く、人、天地の類に肖て、五常の性を懷くとは、董仲舒の謂ふ所の仁義禮智信の類か。莊子天運篇に曰く、六極有り、五常有り、と。韓非子解老篇に曰く、五常之れを得て以て其の位を常にす、と。皆五星躔度に常有るを指すなり。素問五常政大論、及び此の論に謂ふ所の五常は、並びに五行の常氣を指すなり。注者或ひは白虎通を引き仁義禮智信と爲すは誤りなり。金匱藏府經絡先後病に謂ふ所の夫れ人は五常を稟け、風氣に因りて生長す、の如きも、亦た豈に仁義禮智信の謂なるか。莊子駢拇篇に曰く、仁義に多方にして之れを用ふる者は五藏に列するか、と。是れ仁義を以て五藏に對す、其の言尚し。然れども恐らくは此の論の意に非ざるならん。

1 尚書注疏卷十一周書泰誓下第三「今商王受、狎侮五常、荒怠弗敬（孔傳。輕侮五常之教、侮慢不行、大爲怠惰、不敬天地神明）（正義。…五常、即五典。謂父義、母慈、兄友、弟恭、子孝。五者人之常行、法天明道爲之）。」

2 列子 楊朱第七「楊朱曰、人肖天地之類、懷五常之性（張湛注。肖、似也。類同陰陽、性稟五行也）、有生之最靈者、人也。」

3 漢書卷五十六董仲舒傳第二十六「夫仁誼禮知信五常之道、王者所當脩飭也。」

4 莊子 外篇天運第十四「巫咸詔曰、來、吾語女。天有六極五常、帝王順之則治、逆之則凶。」

5 韓非子卷六解老第二十「天得之以高、地得之以藏、維斗得以成其威、日月得以恆其光、五常得之以常其位、列星得之以端其行、四時得之以御其變氣。」

6 黃帝內經素問卷二十 五常政大論第七十「五常政大論第七十（新校正云、詳此篇、統論五運有平氣、不及太過之事。…）黃帝問曰、太虛寥廓、五運迴薄、衰盛不同、損益相從。願聞平氣何如而名、何如而紀也。岐伯對曰、昭乎哉問也。木曰數和、火曰升明、土曰備化、金曰審平、水曰靜順。」

7 多紀元簡 傷寒論輯義 原序「人稟五常、以有五藏

（白虎通曰、五常者何。謂仁義禮智信也。）

と。是れなり。

8 白虎通德論卷八情性「五常者何。謂仁義禮智信也。仁者不忍也。施生愛人也。義者宜也。斷決得中也。禮者履也。履道成文也。智者知也。獨見前聞、不惑於事見微也。信者誠也。專一不移也。」

9 金匱要略方論卷上臟腑經絡先後病脉證第一「夫人稟五常、因風氣而生長。風氣雖能生萬物、亦能害萬物。如水能浮舟、亦能覆舟。」

10 莊子 外篇駢拇第八「駢拇枝指、出乎性哉、而侈於德。附贅縣疣、出乎形哉、而侈於性。多方乎仁義而用之者、列於五藏哉、而非道德之正也。」

經絡府俞¹

謹んで案ずるに、靈樞九鍼十二原篇に曰く、出づる所もて井と爲し、溜むる所もて榮と爲し、注ぐ所もて腧と爲し、行る所もて經と爲し、入る所もて合と爲す、と。此れに據れば經絡の經は則ち經緯の經に非ず、當に讀みて徑に作るべし。釋名に曰く、經は徑なり、

康熙字典未集中糸部「經、：又〔離騷王逸註〕經、徑也。〔釋名〕經、徑也。如徑路無所不通、可常用也。」

1 張仲景傷寒論自序集解「經絡府俞（經、經脉、絡、孫絡。：府、六府、謂胃、大腸、小腸、膀胱、膽、三焦也。俞、經俞）。」

2 黃帝素問靈樞經卷一 九鍼十二原第一「經脉十二、絡脉十五、凡二十七氣以上下。所出爲井、所溜爲榮、所注爲腧、所行爲經、所以爲合。二十七氣所行、皆在五腧也。」

3 釋名卷六釋典藝第二十「經、徑也。如徑路無所不通、可常用也。」

陰陽會通

謹んで案ずるに、陰陽は人身中の陰氣陽氣を謂ふなり。會なる者は、難經に謂ふ所の八會なり。府會大倉、藏會季脇、筋會陽陵泉、髓會絕骨、血會膈俞、骨

會大杼、脉會大淵、氣會三焦、是れなり。會氣常に流通す、故に會通と曰ふなり。病有れば則ち否^よく、故に史記扁鵲傳に曰く、會氣閉ぢて通ぜず、と。陰陽會通は經絡府俞と文相ひ連なれば、則ち並びに人身中の物を指すや明らかなり。然れども注家或ひは易係詞、其の會通を觀、以て其の典禮を行ふ、を引く。方枘圓鑿、安んぞ相ひ容れん。豈に謬ることの甚だしからずや。

1 難經集註卷四「四十五難曰、經言八會者何也。然府會大倉（丁曰、府會太倉者、胃也。其穴者、中腕、是也）、藏會季脇（丁曰、藏會季脇、軟筋之名。其端有穴。直臍章門穴、是脾之募足厥陰少陰所會。故曰、藏會季脇也）、筋會陽陵泉（丁曰、陽陵泉、穴名也。在膝下一寸。外廉、是也）、髓會絕骨（丁曰、隨會絕骨、是骨名也。其穴在外踝上四寸。陽輔穴、是也）、血會鬲俞（丁曰、血會鬲俞、穴名也。在第七椎下兩傍同身寸各一寸五分、是也）、骨會大杼、脉大淵（丁曰、骨會大杼、穴名也。在項後第一椎兩傍相去同身寸一寸五分。脉會大淵穴在右寸內魚際下）、氣會三焦外一筋直兩乳內也。熱病在內者、取其會之氣穴也（丁曰、氣會三焦外一筋直兩乳內者、膻中穴、是也。此者是成會之穴所在也）。」

2 史記卷一百五扁鵲倉公列傳第四十五「是以陽脈下遂、陰脈上爭、會氣閉而不通、陰上而陽內行、下内鼓而不起、上外絕而不爲使。」

3 傷寒論輯義 原序「陰陽會通（易上繫辭、觀其會通、以行其典禮）。」

4 周易注疏卷七繫辭上「聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮。繫辭焉、以斷其吉凶。是故謂之爻。」

5 楚辭章句 宋玉九辯第八「圓鑿而方枘兮、吾固知其鉅鍔而難入。」

終始順舊

謹んで案ずるに、古鑿の法、十二經脉の終始する所を視るを以て、診察の要務と爲す。故に診察の法を謂ひて終始と曰ふなり。靈樞終始篇に曰く、終始なる者は、經脉もて紀と爲し、其の脉口人迎を持し、以て陰陽の有餘不足、平と不平とを知る。天道畢く、と。是れなり。其の他、靈樞數は終始の事を言ふは、枚舉

に暇あらず。探討究尋して乃ち知るべし。省疾問病以下の十四句、皆診察の疎を論ず、故に先づ終始順舊と曰ひて以て端を起こすなり。千金方論治病略例に此れを引きて順の循に作るは、是に似たり。舊に循ふとは、診法初めの如く、終身長づる所無きを言ふなり。

1 黄帝素問靈樞經卷三經別第十一「夫十二經脉者、人之所以生、病之所以成、人之所以治、病之所以起、學之所始、工之所止也。」

2 黄帝素問靈樞經卷二終始第九「請言終始。終始者、經脉爲紀、持其脉口人迎、以知陰陽有餘不足、平與不平、天道畢矣。」

3 張仲景傷寒論自序集解「各承家伎、終始順舊（靈樞九鍼篇及本輸篇、終始篇等、數言終始、可參攷。終始是活字。以下數句皆言終始之疎也）。省疾問病、務在口給、相對斯須。便處湯藥、按寸不及尺、握手不及足（今握手不及足者、診察之疎也。上云按寸、下云跌陽則勿說。手則寸口、足則跌陽。以上二句、言診腹候手足之疎。下數句、專言診脉之疎也）。人迎跌陽、三部不參。動數發息、不滿五十。短期未知決診。九候曾無

髣髴、明堂闕庭、盡不見察。所謂窺管而已。」

4 唐 孫思邈 備急千金要方卷一論治病略例第三「觀今之醫、不念思求經旨、以演其所知、各承家伎、始終循舊、省病問疾、務在口給。」

動數發息

謹んで案ずるに、數發の二字、無義にして帶説なり。古文此の例甚だ多し。仲景蓋し其の法を襲ひしならん。詩邶風擊鼓篇に曰く、死生契闊し、子と説を成す、と。是れ豈に死闊もて誓と爲すか。死闊の二字、無義にして帶説なり。孟子離婁篇に曰く、夫れ童子豈に夫妻子母の屬有るを欲せざらんや、と。下文に妻を出だし子を屏く、と曰へば、則ち夫母の二字も亦た無義にして帶説なり。左傳僖二十三年に曰く、左に鞭駟を執り、右に橐韃を屬ね、以て君と周旋す、（杜注に云ふ、駟は弓末に縁無き者なり。橐は以て矢を受け、韃は以て弓を受く、と）と。是れ鞭韃の二字、無義にして帶説なり。此の類を觀れば見るべし。脉動けば則ち息み、息めば則ち復た動く、故に其の數を謂ひて動息と曰ふなり。

1 張仲景傷寒論自序集解「動數發息（數發二字、無義帶說。古文四字連熟而二家爲帶說者、往々有之）。」

伊藤鳳山 左傳章句文字卷三「左執鞭弭、右屬囊韃。杜氏曰、弭、弓末無緣者。囊以受箭、韃以受弓。馨謹案、杜氏不釋鞭字。據晉語韋注、馬鞭也。雖然、奚得左手執鞭與弭、右手屬囊與韃乎。蓋鞭韃二字、無義帶說。故韋注云、言以禮避君。君不旋乃敢左執弓、右屬手於房以取矢、與君周旋相馳逐也。是只言弓矢、而不及鞭韃、則韋意亦以鞭韃爲帶字。古文四字連用、而上下二字帶說者、往往有之。詩邶風曰、死生契闊、與子成說。是死闊二字、無義帶說。夫婦之情、死闊豈可誓耶。其義可思而知。孟子曰、夫章子豈不欲有夫妻子母之屬哉。是夫母二字、無義帶說。故下文但曰出妻屏子、而不言夫母二字也。鞭弭囊韃亦此類也。」

竹添井井 左氏會箋卷六僖公廿三年「其左執鞭弭、右屬囊韃、以與君周旋（弭、弓末無緣者也。囊以受箭、韃以受弓也。屬、著也。周旋、相追逐也。箋曰、晉語韋注、囊矢房、韃弓弣也。方言云、弓藏謂之韃。蓋鞭韃二字無義、只是帶說耳。故韋注云、言以禮避君。君不旋乃敢左執弓、右屬手於房以取矢、與君周旋相馳逐也。是只言弓矢、而不及鞭韃、則韋意亦以鞭韃爲帶

字。古文四字連用、而上下二字帶說者、往往有之。詩邶風、死生契闊、與子成說。是死闊二字帶說。孟子曰、夫章子豈不欲有夫妻子母之屬哉。是夫母二字帶說。故下文但曰出妻屏子。鞭弭囊韃亦此類也）。」

2 毛詩注疏卷二之一邶風 擊鼓「死生契闊、與子成說（毛傳。契闊、勤苦也。說、數也）。執子之手、與子偕老。」

3 孟子集注卷八離婁下「夫章子豈不欲有夫妻子母之屬哉。爲得罪於父、不得近、出妻屏子、終身不養焉。」

4 春秋左傳注疏卷十五僖公二十三年「若不獲命、其左執鞭弭、右屬囊韃、以與君周旋（杜注。弭、弓末無緣者。囊以受箭、韃以受弓。屬、著也。周旋、相追逐也）。」

孔子云生而知之者上學則亞之

論語衛靈公篇に、孔子曰く、生れながらにして之れを知る者は上なり。學びて之れを知る者は次なり、と。蓋し仲景、此の語を鍊鍛して文を成せしならん。古人、古書を引くに、鍊鍛して文を成し、原文の若く

なるを必^もいざる者、往往にして之れ有り。左傳成二年に曰く、秦誓に謂ふ所の商は兆民離れ、周は十人同じと。是れ秦誓、受到億兆の夷人有り、心を離し徳を離す、予に亂臣十人有り、心と同じうし徳を同じうす、の語を鍊鍛して文を成すなり。故に昭二十四年に引く所、今の秦誓と大いに同じ。此れも亦た文家の一法、知らざるべからざるなり。

1 論語集注卷八季子第十六「孔子曰、生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之、又其次也。困而不學、民斯爲下矣。」

2 春秋左傳注疏卷二十五成公二年「君子曰、衆之不可已也、大夫爲政、猶以衆克、況明君而善用其衆乎。大誓所謂商兆民離、周十人同者、衆也。」

3 尚書注疏卷十一周書秦誓中第二「受有億兆夷人、離心離徳。予有亂臣十人、同心同徳。」

4 春秋左傳注疏卷五十一昭公二十四年「大誓曰、紂有億兆夷人、亦有離徳。余有亂臣十人、同心同徳。此周所以興也。」

多聞博識知之次也

謹んで案ずるに、此の二句は、仲景、論語述而篇の語に本づき（子曰く、蓋し知らざるも之れを作る者有り、我は是れ無きなり。多く聞き其の善なる者を選びて之れに従ひ、多く見て之れを識るは、次の次なりと）、以て學則亞の一句を解す。聖語を以て聖語を解くも亦た文の一法なり。多聞の上、然則の二字を蓄へて看る。多聞博識の一句は學の一字を解き、知之次也の一句は亞の二字を解く。若し孔子より亞也に至る五句、皆孔子の言と爲して一氣に讀めば、則ち文語鄭重にして、殊に張氏の旨を失す。

1 論語集注卷四述而第七「子曰、蓋有不知而作之者、我無是也。多聞擇其善者而從之、多見而識之、知之次也。」

2 傷寒論 傷寒卒病論集「孔子云、生而知之者上、學則亞之。多聞博識、知之次也。」

3 張仲景傷寒論自序集解「多聞博識知之次也（此二句、

仲景解學則亞之一句。言多聞博識、即學也。知之次、即亞之也。先輩此二句亦爲孔子語。何愚之甚。」

傷寒論輯義 原序「余宿尚方術、請事斯語（…當今居世之士、不留神醫藥、精究方術。獨仲景宿尚之。然無越人之才之秀、唯欲多聞博識、以精究之。故誦孔子語、以服膺之而已。此蓋仲景之謙辭）。」